ブルースリー物語　その１

帯広市医師会
帯広中央病院
吉田（よしだ）　貢（みつぐ）

1973年12月ブルースリーの映画が日本で初公開したが、その衝撃は余りにも大きかった。

小生は小学生だったが、あの頃は日本中の少年たちが新聞紙を丸めてヌンチャクを自作し、アチョーと怪鳥音を上げ、ブルースリーに成り切っていたのではないだろうか？

ところが日本で映画が公開された時点で、すでにブルースリーはこの世にはいなかったのである。

1973年７月20日、32歳の若さで死亡。

そして死の30日後、初のハリウッド進出作品「燃えよドラゴン」が世界中で公開され大ヒットとなる。リーは、あの世に旅立った後に、世界の銀幕スターの仲間入りを果たしたのだった。

またブルースリーの死は、そのデビューと同じく余りにも突然で衝撃的だった。

慢性頭痛に悩まされていたリーは、愛人（女優のベティ）宅で、鎮痛剤のエクアジックを飲み仮眠するが、そのまま意識が戻らなかったのである。

警察の調書から､死亡した当日を時系列で見ると、
17時：ベティの家をレイモンド・チョウと共に訪問する。彼女の証言によると､両者は次回作となる「死亡遊戯」の台本の話をしに来たとのこと。
19時：リーは頭痛を訴え、ベティから鎮痛薬もらい服用したが､起きていられない程の頭痛だったので､彼女のベッドで横になる。リーが仮眠したので、レイモンドは一人で夕食に出かけた。
21時半：レイモンドが電話すると、ベティは、リーが起きないと返答。
22時：ベティのアパートに戻ったレイモンドはリーの主治医に電話するがつながらず、ベティの主治医を呼ぶ。10分後医師が到着。リーは心肺停止の状態で､医師は蘇生を試みるも回復せず､救急車を要請。
23時：クイーンエリザベス病院へ救急搬送。
23時半：死亡確認。

ベティ・ティンペイ　26歳の女優　香港ショービジネスの裏社会と関わっていた。放縦に生きるベティは、酒や賭博におぼれ、悪い仲間もいた。よって「三合会」につけ込まれ、借金の返済も含め、その尻拭いをリーがしていた。

三合会

香港のナイトクラブや映画館、賭博、性風俗、麻薬等を取り仕切るマフィア。彼らは邪魔者を容赦なく痛めつけることで有名であった。映画「カンフー・ハッスル」の「斧頭会」を思い浮かべてほしい。

レイモンド・チョウ

香港のプロデューサーで、ブルースリーの主演映画３本で、自ら設立したゴールデン・ハーベスト社を香港最大の映画会社にした。

謎に包まれた悪人で、冷酷で信用のできない男、「笑顔のトラ」というあだ名があった。興行収入は彼が管理していたが、会計が不明瞭でブルースリーとは金銭面で対立。当然リーは他の映画会社にも声をかけ始める。彼は「リーの死は腹上死だ」と陰で話していた。確かにベティの主治医が後始末をしてから救急車を呼んだ可能性はあるが、警察の厳しい尋問の中、３人でウソを貫き通せたのだろうか？

リーの死は「不審死」で、当然司法解剖された。

外傷なし。アレルギー反応なし。毒物検出なし。

唯一かつ最大の所見は「脳浮腫」で、脳が13％も膨らんでおり、脳幹の呼吸中枢が圧迫され、呼吸が止まってしまったのである。

薬物では微量の大麻のみが検出された。ここからリーの脳浮腫は、彼が常用していた大麻が原因だと主張する人もいるが、大麻は、日本を除く世界中で広く使用されており、脳浮腫の副作用は報告されていない（日本は敗戦後GHQにより禁止された）。

ではなぜ、このような急性の脳浮腫が生じたのか？

考えられる原因は一つしかない。死亡前にベティからもらって飲んだ痛み止めの「エクアジック」である。これはブルースリーの常用薬ではない。

「エクアジック」は、鎮痛薬のアスピリンと非バルビツール酸系のメプロバメート（抗不安薬）とを主成分とする鎮痛剤であるが、アスピリンは現在でも世界中で広く使用されている安全な薬で、脳浮腫の報告はない。問題はメプロバメートである。

同薬はサリドマイドと同系統の薬で、1960年にはすでに非行青少年の乱用＆依存の問題が取り沙汰されており、さらに同薬で死亡した人も多数存在し、リーが死んだ後、ひそかに市場から姿を消した。

死亡診断書に書かれた死因は「薬物過敏症による急性脳浮腫」で、「不運な事故死」との結論。

実は1973年５月10日、死亡の10週前、リーは死亡した日と同じような脳浮腫から“ドラゴン危機一髪”で助かっている。ゴールデン・ハーベスト社の録音スタジオで、映画のアフレコ中に卒倒し意識不明に陥り、この時はすぐに病院に運ばれた。

その日の撮影所はかなり暑く冷房もなく、汗かきのブルースリー(腋窩の汗腺切除術まで受けていた)は熱中症になり脳浮腫となったのではと推測され、マンニトールの点滴で脳浮腫を改善し、２時間後、リーは奇跡的に意識を取り戻したのである。

このような重大インシデントに見舞われたリーだったが、その後のアメリカの病院での精密検査でも全く異常がなかった。（つづく）